

バスケットボール競技に於けるシュートとアシストパスの有効性

The relation between shoot and assistant pass in basketball game

前 山 定

Sadamu MAEYAMA

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the evaluation of players using static analysis of the probability of shoot and assistant pass resulting in the score in NBA games. The samples were the two games (Orlando Magic vs. Newjersey Nets) of NBA basketball league in 1996 in Japan. The probabilities of assistant pass and the score in individual players were counted and analyzed, and also counted the number of offense of Orlando Magic team in these games respectively. The results showed that the highest scorer gained the most of assistant pass associated with the score.

Compared with the first game, the number of offense of Orlando Magic team was decreased in the second game. It was proved that the professional team found out the defect point of game and revised in the next game as soon as possible.

Key words; shoot, assistant pass, point guard, lead guard.

はじめに

バスケットボールのゲームで勝つためには、シュート（得点力）、正確なアシストパスおよびスピードが要求される。縦28m×横15mのコート内でスピードと正確なアシストパスからのシュート（得点率の高いシュート力）の展開が醍醐味となっている。爆発的な得点力を得るシューター（得点王）と、シューターが効率よく得点を上げるために用いるアシストパスの2つを均等に成功させるプレイヤーのいることが、相手チームのガードを分散させ得点を上げやすくする。アトランタオ

リンビックのバスケットボール競技において、そのパワーを証明したのがドリームチーム（アメリカ）であった。

そこで、シュートとアシストパスをバランス良く成功させるプレイヤーの存在の確認のために、1996年11月に東京で行なわれたNBA(National, Basket Ball, Association) 公式戦、Orlando Magic 対 Newjersey Nets 1回戦および2回戦のビデオテープから世界的なバスケットボール選手（マイケル・ジョーダン）に継ぐ得点力を持つ、アンファニー・ハーダウェイ選手（1995年NBA 得点ランキング11位・アシストパス7位）が所属するオ

オーランドマジックのチームについて、各プレイヤーのアシスト数およびシュート本数と得点本数を測定し、シュートとアシストパスが均等に行える選手の存在の確認を試みた。

さらに、1戦と2戦のシュート・アシストパスの比較も行った。

方 法

I. 被検者

被検者はオーランドマジックチームで1996年11月に東京で行なわれた NBA(National, Basket Ball, Asosietion) 公式戦、Orlando Magic 対 Newjersey Nets 1 回戦および2 回戦に出場した選手9名であった。

II. 測定方法

Orlando Magic 対 Newjersey Nets 1 回戦および2 回戦のビデオテープを再生し、シュート本数、シュート成功本数、アシストパス本数、アシストパス成功本数、得点に結びついたアシストパス本数の資料の統計処理を行った。

結 果

1. シュート成功率 (図1).

オーランドマジックチームのシュート成功率 (シュート成功数/全シュート) を2試合平均でみると、背番号21番の60.0%、25番54.2%、54番52.2%、1番41.5%および4番41.2%の順であった。しかし、背番号21番の平均シュート率が高いが、第1試合と第2試合ではシュート成功率に40%との差があった。

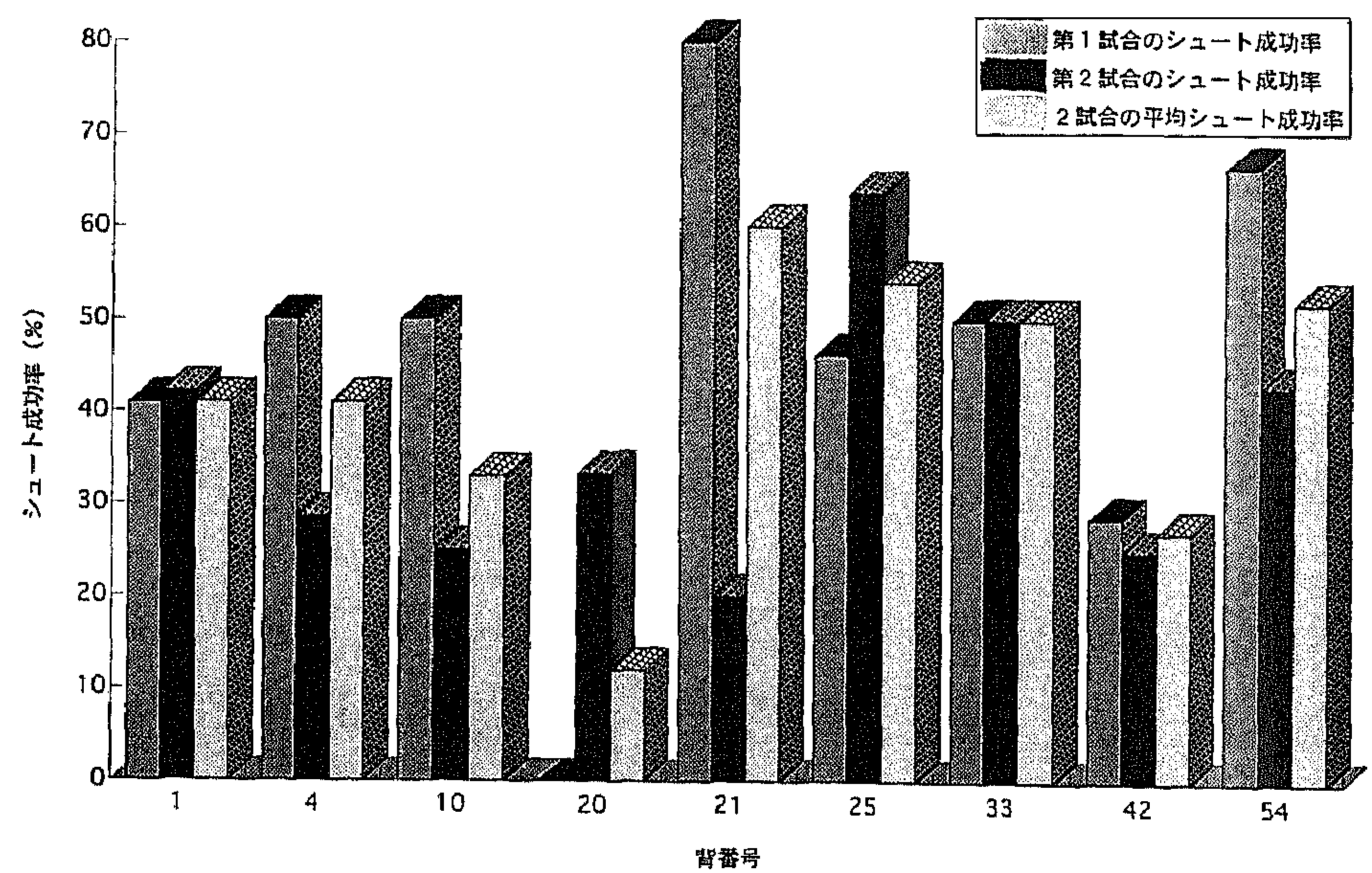


図1 オーランドマジックシュート成功率

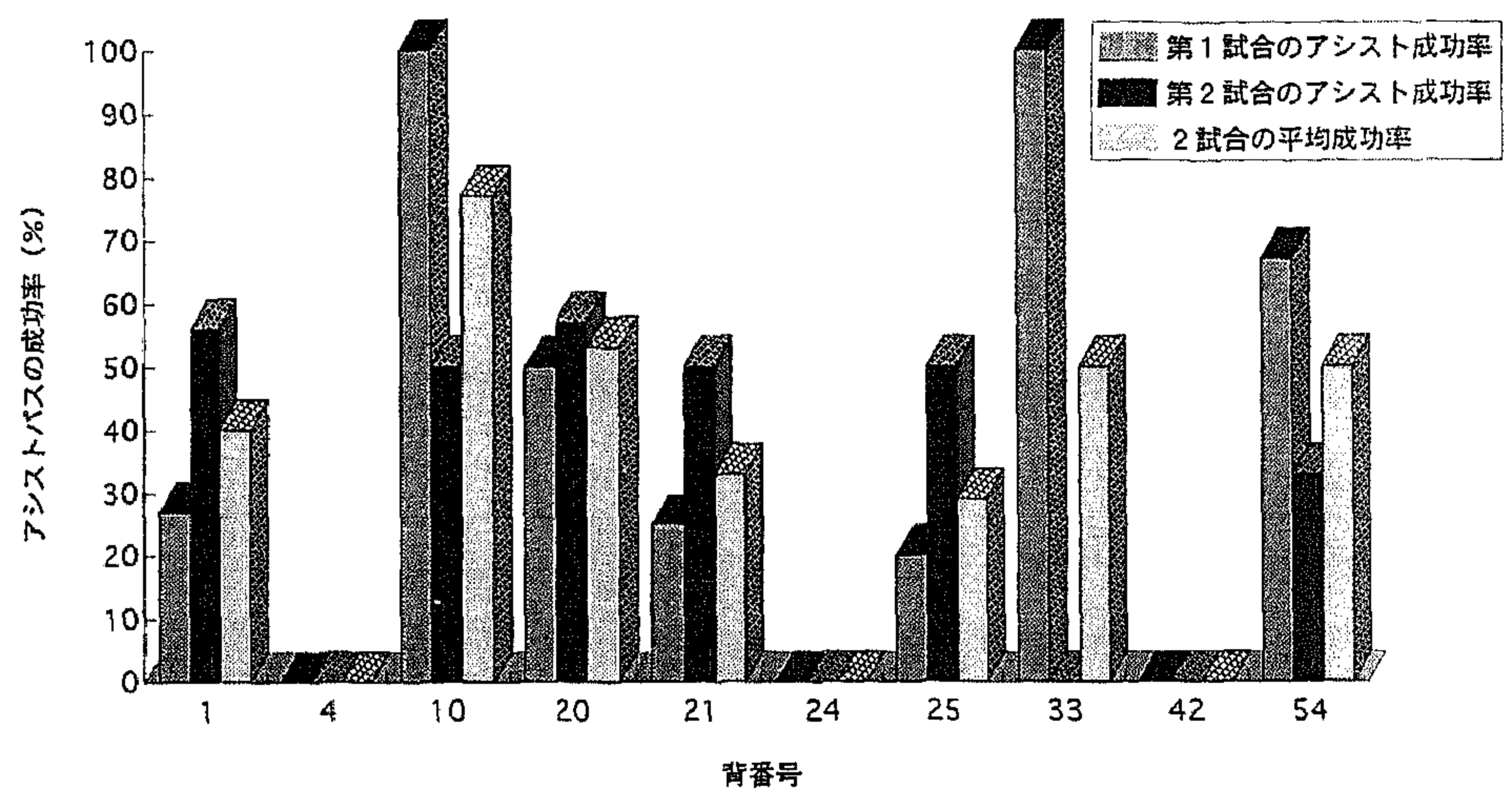


図2 オーランドマジックチームアシストパス成功率

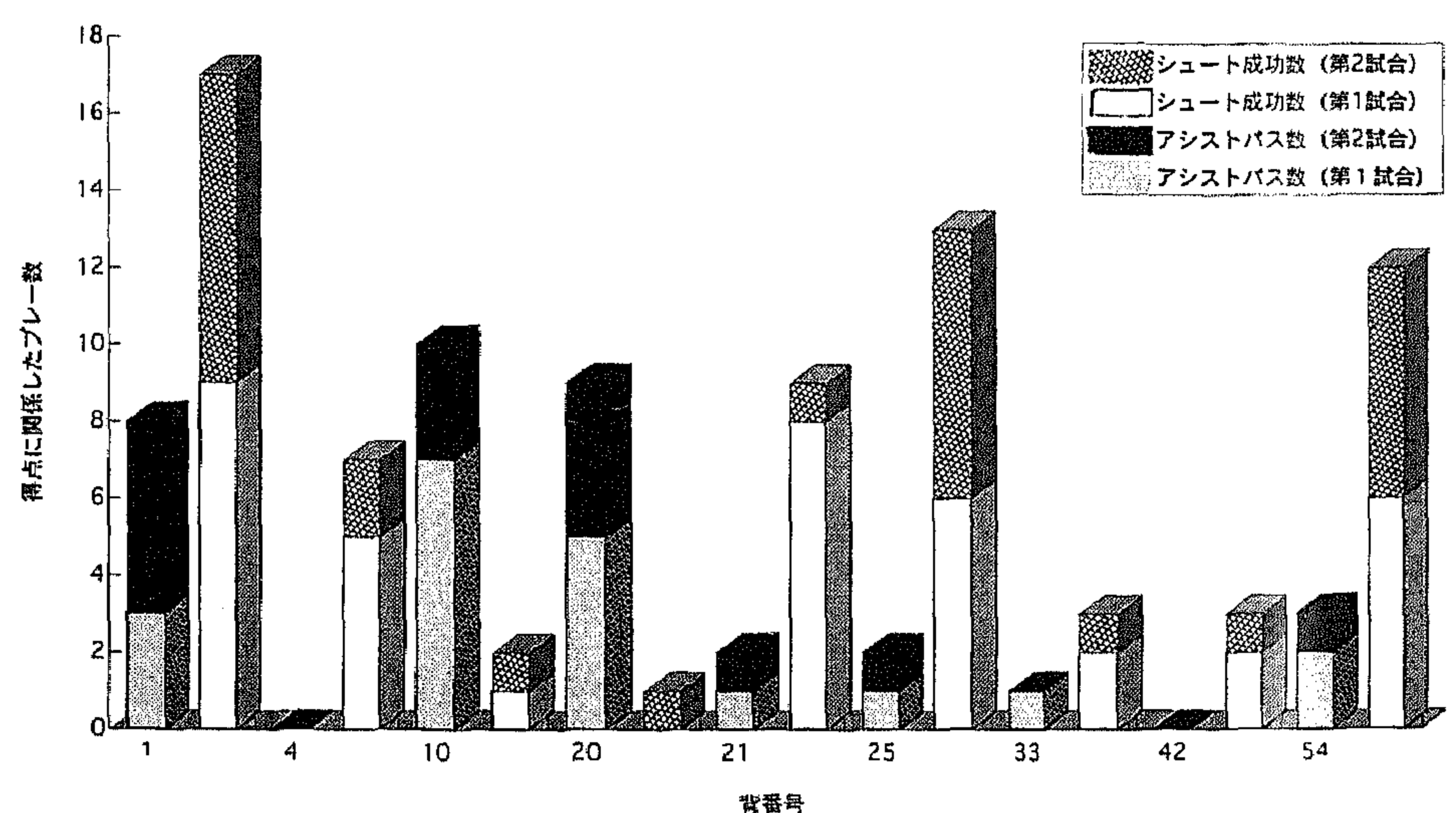


図3 得点に関係したアシストパス数・シュート成功率

2. アシストパス成功率 (図2).

オーランドマジックチームのアシストパス成功

率（アシストパス成功本数／全アシスト数）を2試合平均でみると、背番号10番の77.0%、20番53.0%、33番50.0%、54番50.0%、1番40.0%、21番33.0%および25番29.0%であった。

3. アシスト成功本数とシュート成功本数（図3）

アシスト成功本数を2試合合計本数でみると、背番号10番の10本、20番9本、1番8本および54番3本の順であった。シュート成功本数を2試合合計でみると、背番号1番の17本（得点45点）、25番13本（得点29点）、54番12本（得点26点）および4番7本（得点17点）であった。

4. アシストパス成功率と得点に絡んだ全プレイ比率（図4）

2試合の個人のアシストパス成功率と得点に絡んだ全プレイ比率（アシストパス+シュート）の関係をみると、アシストパス成功率の高い者は得点に絡んだ全プレイ比率も高い正の相関関係にあった（ $R=0.777$ 、 $P<0.05$ ）。

5. 2試合の各パフォーマンスの数の比較（図5）

得点に結びついたアシストパス数、全アシストパス数、得点に結びついたシュート数および全シュート数をみると、得点に結びついたアシストパス数25.0%、全アシストパス数26.8%、得点に結びついたシュート数39.6%および全シュート数12.5%と何れも2試合目が低下していた。

6. 2試合のシュート成功率とアシストパスの比較（図6）

シュート成功率は第1試合に比較して15.8%低下したのに対し、アシストパスの成功率は逆に0.5%あがっている。

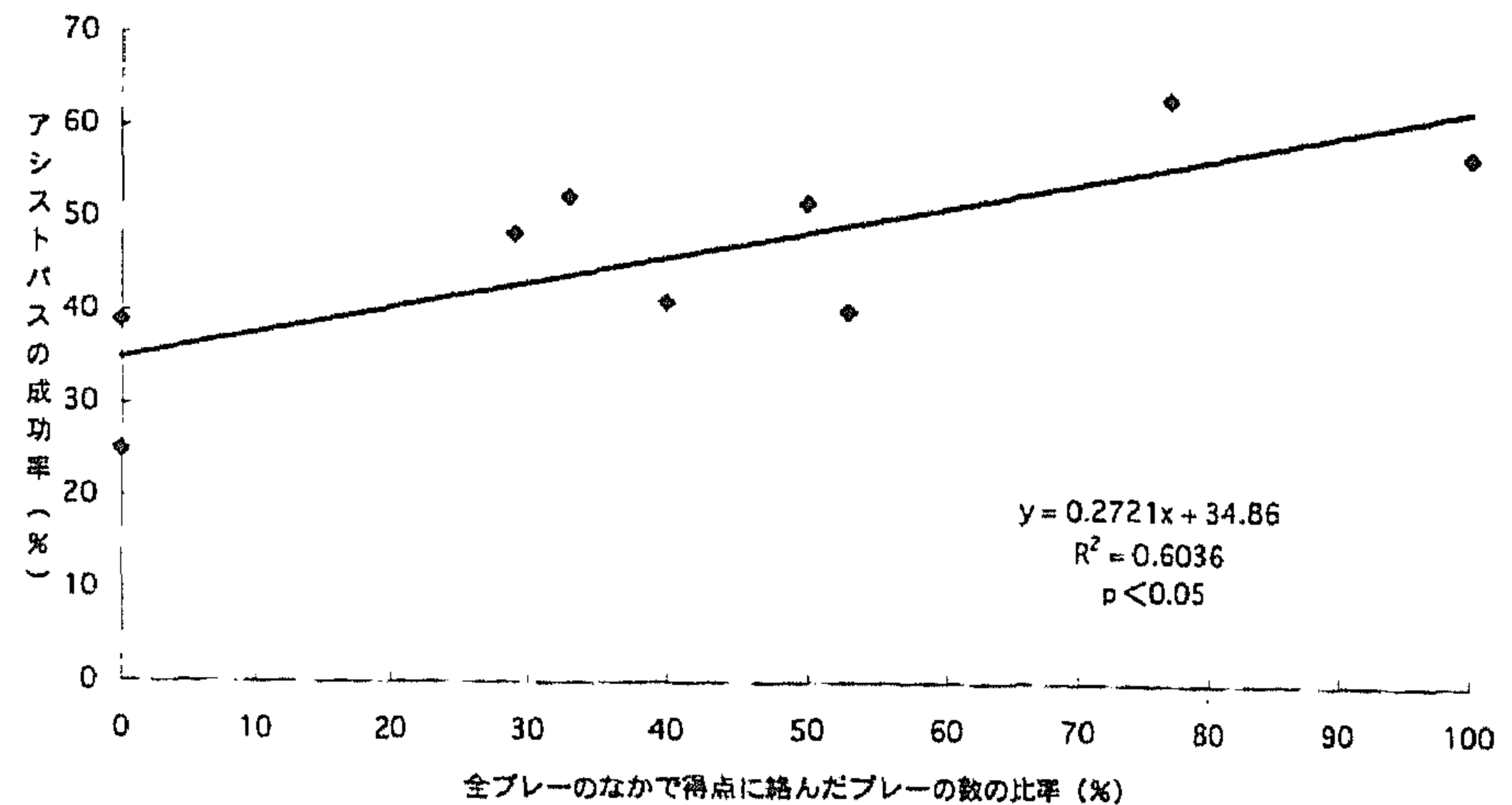


図4 アシストパス成功率と全プレーの得点に関係したプレー数の比率の関係

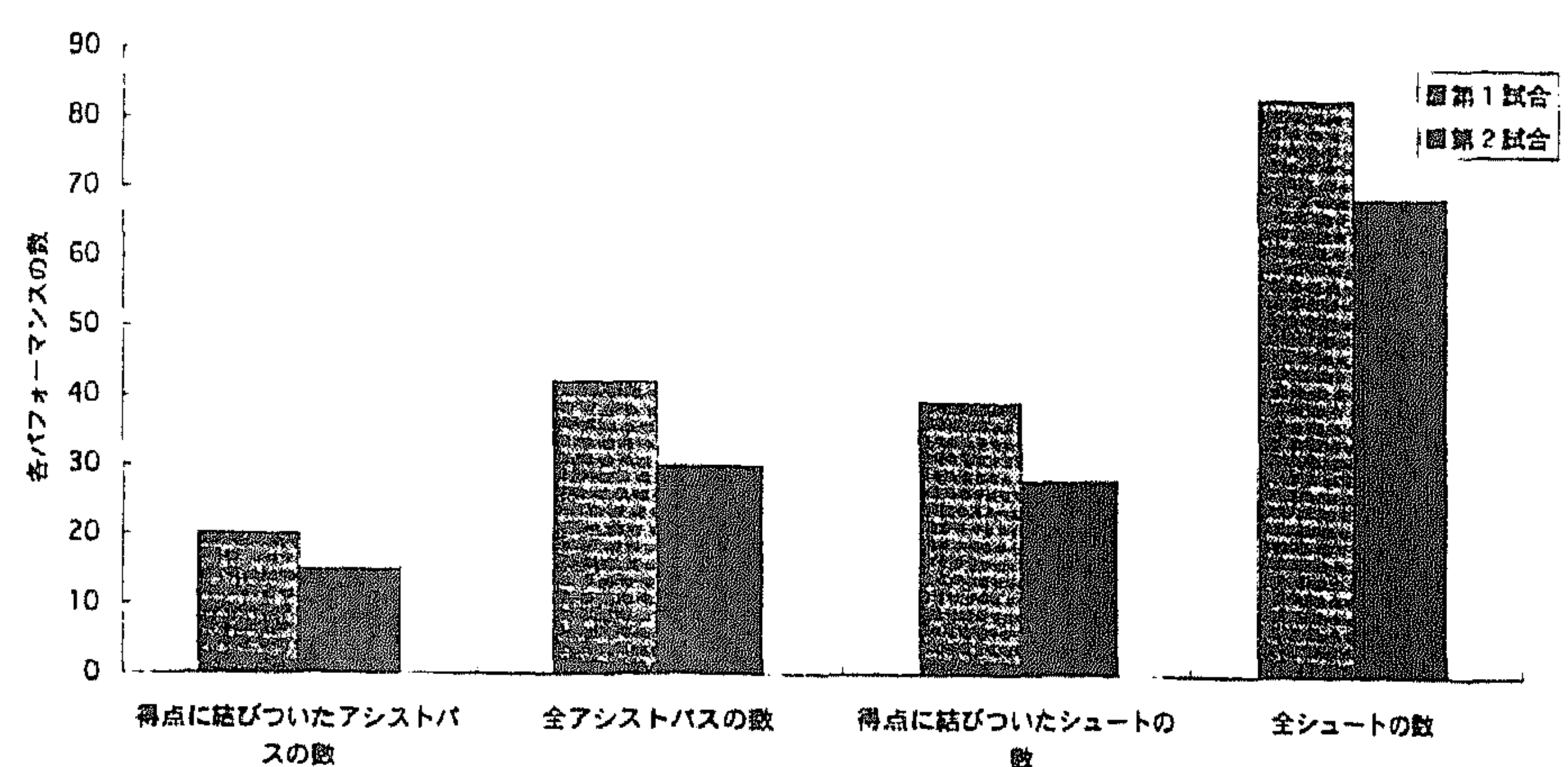


図5 得点に関係したアシストパス数・シュート数および全アシストパス数・全シュート数

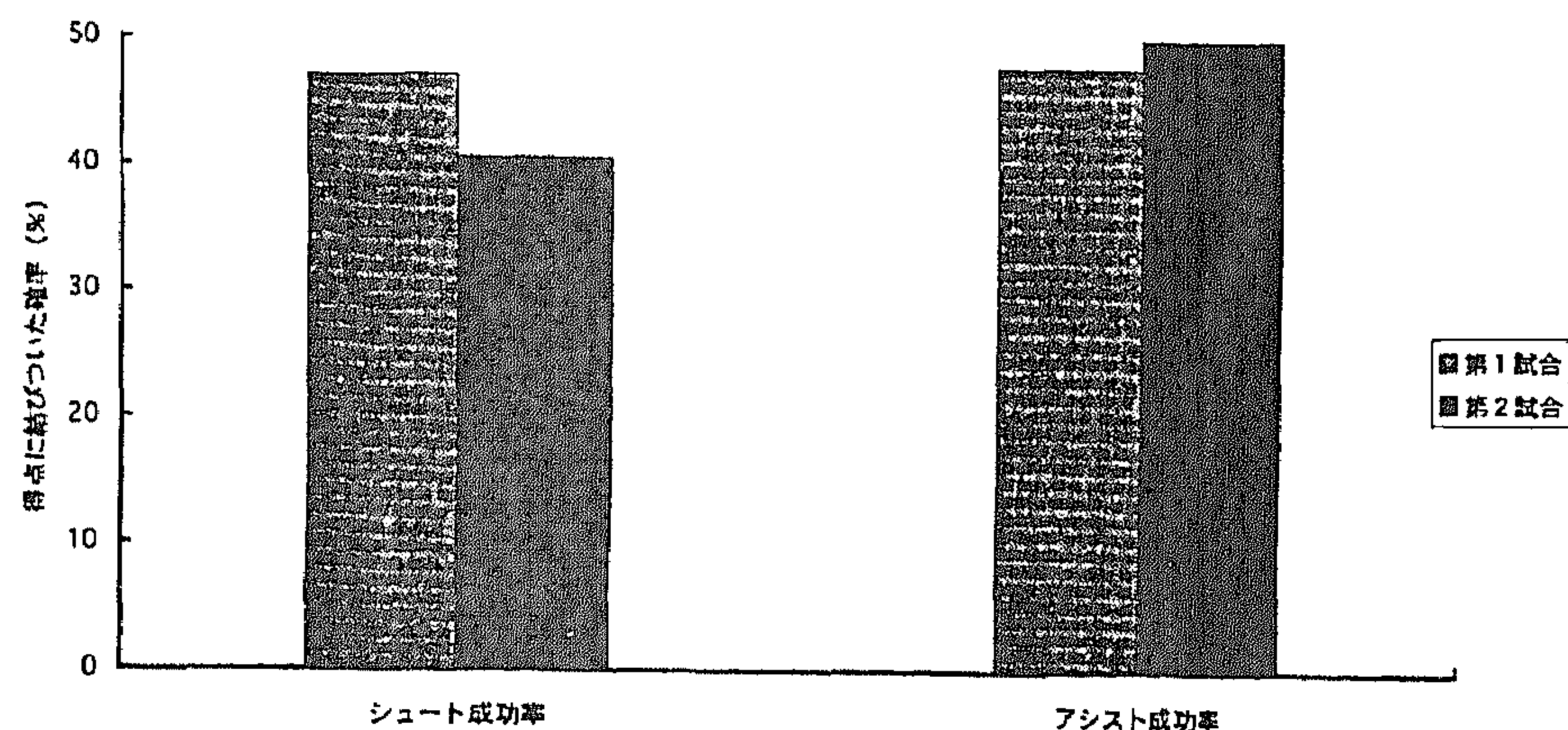


図6 第1試合と第2試合の得点に関係したシュート成功率とアシストパス成功率の比較

考 察

I シュート・アシストパス

NBA(National, Basket Ball, Asosietion)公式戦、Orlando Magic 対 Newjersey Nets 1回戦および2回戦に出場した選手9名について、得点に関係したアシストパスとシュート成功率と得点に関係したシュート本数から図1、図2、図3、背番号21番、

25番、54番のシュート成功率が50%以上と高くシューター（ポイントガード）であることが示唆されている。一方、アシストパス成功率50%以上の高い選手は背番号10番、20番、33番、54番でガード（リードガード）の選手であることが示唆された。シュート成功率、アシストパス成功率両方が高い選手は、背番号54番の選手でリードガード、ポイントガードをこなせる選手の用にみえるが、得点に関係したプレー数からみるとアシストパス数3本と少なく得点に関係したシュート数12本と3番目に多くポイントガードの選手と考えられた。背番号1番の選手はシュート2試合平均成功率が41.5%、アシストパス2試合平均成功率40.0%とシュート成功率で4番目、アシストパス成功率で6番目で、成功率からみる限り、オーランドマジックチームの中心選手とは考えられないが、得点に関係したプレー数とシュート成功本数、得点に関係したアシストパスおよび得点2試合合計45点とチームで一番であることから、リードガード、ポイントガードをこなせる中心選手であることが示唆された。

図4から、アシストパス成功率の高い選手は、全プレーのなかで得点に関係したプレイ比率が高いことは、バスケットボール本来のスピード、スキル、スタミナ等をおかね備えたプレーヤーであると考えられる。

Ⅱ 第1戦と第2戦の比較

第1戦と第2戦の試合内容を比較して、アシストパス成功率が第2戦が上がったにも関わらず（第1戦オーランドマジック108対ニュージャージーネッツ95・第2戦オーランドマジック86対ニュージャージーネッツ82）、シュート成功率が第2戦が低下した。このことはネッツがディフェンスに力を入れてきたことにより、第2戦のマジックのシュート成功率を低下させたことが示唆された。

ま と め

- 1) シュート成功率、アシストパス成功率からのリードガードとポイントガードの選手として判断は難しく、得点に関係したプレー数とシュート成功本数、得点に関係したアシストパスの関係等から考慮する必要がある。
- 2) バスケットボールにおいて、リードガードとポイントガードの両方をこなせる選手が理想であるがオーランドマジックチームでは、背番号1番の選手だけであった。
- 3) アシストパス成功率の高い選手は、全プレーのなかで得点に関係するプレイ比率が高いことが示唆された。

参考文献

- 1) Bob Knight, Pete Newell著，笠原成元監訳：ウィニング・バスケットボール，大修館書店，東京，1992.
- 2) Dean Smith著，山本雅之訳：マルティプルオフenseアンドディフェンス，日本文化出版，東京，1992.
- 3) Jack Ramsay著，山本雅之，前山 定，西山 亜喜男共訳：プレッシャー・バスケットボール，ビジネス社，東京，1996.
- 4) Jay Mikes著，石村宇佐一，鈴木 壮，吉沢洋二共訳：バスケットボールのメンタルトレーニング，大修館書店，東京，1991.
- 5) 倉石 平：倉石 平のオフenseバスケットボール，ベースボールマガジン社，東京，1995.
- 6) Morgan Wootten著，水谷 豊他共訳：バスケットボール勝利へのコーチング，大修館書店，東京，1994.
- 7) 李 宇載：「バスケットボール」得点力アップの攻撃プレー，池田書店，東京1996.
- 8) 奥山秀雄：コンピューター動作分析システムを用いたバスケットボールのシュート分析，国際武道大学紀要7：111-120，1991.
- 9) 島田出雲：バスケットボール勝利への戦略・戦術，大修館書店，東京，1994.
- 10) 島津大宣，泉川 喬，山本外憲：第18回ユニバーシアード'95福岡大会、日本対アメリカ，東京体育学研究，43-52，1996.
- 11) 山根成之：バスケットボールの心理学，不味堂出版，東京，1994.
- 12) 吉井四郎：バスケットボールのコーチング

(戦法・作戦編) 大修館書店, 東京, 1977.

- 13) 吉井四郎: バスケットボール指導全書No 3 特殊戦法による攻防, 大修館書店, 東京, 1989.